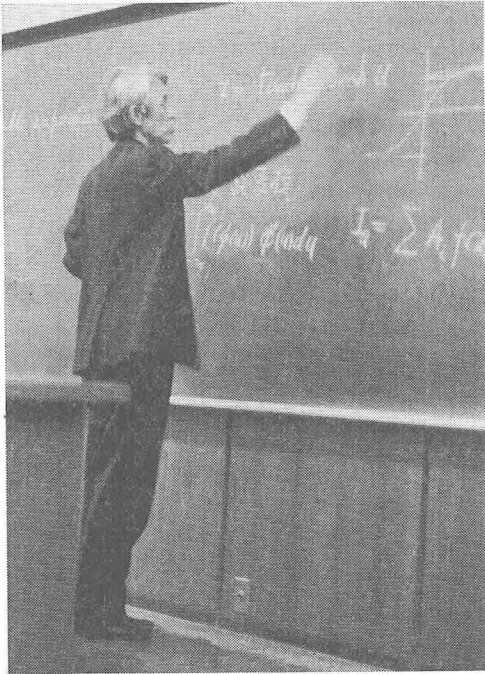


高橋秀俊先生

後藤英一 (情報研)

理広報前号の小平先生の“数覚”に深い感銘を受けた。数学者にとって論理は決してすべてではなく、“数覚”としか呼びようのない感覚がむしろ本質的な役割をもっているということである。数学に限らず、学問と芸術の各分野にはそれぞれに独特の“感覚”が必要であるように思われる。これを“汎覚”とかりに呼ぶことにするが、これは五感とは異なり、まだ現代の心理学の対象外であり、まして〇×式問答とその結果の計算機による処理によって今日測ることのできるようなものではない。しかし、それは人間の創造的活動の活動力として、なにかこのようなものがあるとはっきり感じられる何物かなのである。

高橋先生に接したことのある人たちでこの“汎覚”の存在を疑う者はまずあるまい。先生の御研究は、既存の学問の分野の枠の分類に従えば、物理学、応用数学、電子工学、情報科学の多岐にわたっている。しかもそれぞれの分野で、先駆的かつ指導的な実績をあげられた。強誘電体の理論、雑音に関する Nuquist の定理の一般化などにより、物性論と統計物理学の発展に大きく寄与された。また Tschebyscheff 特性を有する梯子型濾波器の構成法はこの分野で画期的かつ先駆的な研究であった。情報科学分野では朝日賞を贈られたパラメトロン計算機の完成、東洋レーヨン科学技術賞を贈られた量子雑音の理論がある。また、素数を法とする Exact な計算法の



数論的な統一の解釈と新積分公式の導入に関する最近の成果も画期的なものである。

これら一見多岐にわたる御研究も先生のユニークな“汎覚”あるいは数理物理学的世界観の中では実は有機的に関連したものとなっている。物理学汎論と呼ばれる一連の著述と、また日常にみられる物理的現象の謎を快刀乱麻を断つように解明した数多くのエッセイを通じて、先生は後進の学徒に多大の影響と感銘を与えられた。その最近のものは、本年初頭“数理と現象”(岩波)、“数理の散策”(日本評論)の2冊に収められて出版されたことをここに付記しておく。

国内学会では、情報処理学会会長と物理学会委員長を再度歴任され、両学会の発展と研究交流に大きく貢献された。また国際学会としては、国際理論物理学会、国際電波科学会総会、強誘電体国際会議、日米コンピューター会議などの日本での開催とその運営に尽力され、国際学術交流の面にも大きく貢献された。

先生は心身ともにまだまだお若く、門下生一同としては御停年がまだ実感となるには至っていない次第である。今後とも物理学汎論の精神をもって学界の後進を鼓舞し続けて下さることを御願いととも、研究と生活をエンジョイされるよう切に祈る次第である。

高橋秀俊先生：物理教室における最終講演にて
研究も世界に先んじたものであった。数値積分公式の関